

第1部 問題提起

スマート農業が興す“農村デジタルトランスフォーメーション”

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター エクスパート 三輪 泰史



三輪エクスパート

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました日本総合研究所の三輪と申します。

本日は、年度末のお忙しいなか、前の方、後ろをご覧いただければと思いますが、この会場にいっぱいになるほど、たくさんの方にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。御礼申し上げます。

本日でございますが、まずシンポジウムの冒頭に当たりまして、私のほうから問題提起をさせていただければと思います。

今日、私が皆様方にお話ししたいのは、農業と農村の今後の姿です。

将来像です。皆さん、農業、農村という言葉が聞かれて、どのようなイメージを持たれますか。私自身は、広島、岡山県境の田舎の中核都市出身でございますので、農業を昔から見てきたのですが、そういうふうに農業に触れている方、もしくは都市におられる方、いろんな方がいていろんな見方をしているのが農業、農村だと思います。その中で、まさにこれから力強く魅力のある農業、農村をどうやってつくっていくのか。そこに対して、簡単ではございますが、問題提起ということさせていただければと思います。

〔スマート農業が興す“農村デジタルトランスフォーメーション”〕

今日のテーマでございます。前の画面をご覧いただければと思います。スマート農業が興す“農村デジタルトランスフォーメーション”。最近、ビジネス誌を見ますと、よくDX、DXというふうに書かれているものでございます。今日、ご参加の皆様は、IoT、ICTなど、あまりお詳しくない方もおられると思いますが、今日、お帰りのときにはぜひ、DXと見たらデラックスではなくて、デジタルトランスフォーメーションなんだというふうに思っただけければと思います。

発表者紹介【日本総合研究所 三輪泰史（みわ やすふみ）】



株式会社日本総合研究所 創発戦略センター エクスパート(農業)
農業チームリーダー

【学歴・職歴】

2002年 東京大学農学部国際開発農学専修卒業
2004年 東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻修士課程修了
同年 日本総合研究所入社
2008年 東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻博士課程単位取得

【委員等】

農林水産省「食料・農業・農村政策審議会」委員
株式会社農林漁業成長産業化支援機構 社外取締役
内閣府「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)次世代農林水産業創造技術」サブPD
農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)アドバイザリーボード委員長

次世代の国づくり

0

Copyright (C) 2019 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

初めに、簡単に自己紹介をさせていただければと思います。

私自身は、日本総合研究所のなかの創発戦略センターで、事業であったり社会の新しい枠組みをつくり出す、英語でいいますとインキュベーションを行う組織に所属しております。そのなかで、長い間、農業の問題に取り組んでまいりました。

私自身は、日本総合研究所の研究員以外に大きく三つの肩書で、日本の農業について、微力ではございますが、貢献させていただいております。

一つが農業×政策。こちらは農水省にあります「食料・農業・農村政策審議会」という農水大臣に対する諮問機関でございます、そちらの委員を務めさせていただいております。

二つ目が農業×金融ということでございます。農水省系の官民ファンド、A-FIVE というものがございます。そちらの社外取締役をやらせていただいております。

もう一つ、最後は農業×技術。こちらは農水省系の国立研究機関で農研機構というのがございます。そちらのアドバイザリーボード、委員長を務めております。

このような形で、まさに農業×政策、金融、技術、いろんな知見が農業の中に求められているような時代になっているんだな、というように私自身も感じておる次第でございます。

〔I. 日本農業の新たな潮流〕

今日の問題提起の最初に、日本の農業の現状について改めて簡単に見ていきたいなと思います。

【はじめに】 AI/IoTが実現する皆が儲かる次世代農業＝「アグリカルチャー4.0」

- 2016年の著書、2017年の日本総合研究所シンポジウムにて「アグリカルチャー4.0」という新しい農業の姿を提唱。

農業の発展の歴史

アグリカルチャー1.0	紀元前～	天水農業から灌漑農業へ。B技術と農業土木。四大文明の基盤。
アグリカルチャー1.5	18世紀～	ヨーロッパの「農業革命」。三圃式農業から輪栽式農業へ。産業革命を下支え。
アグリカルチャー2.0	1940年代～	化学肥料の実用化。高収量品種による「緑の革命」。
アグリカルチャー3.0	1960年代～	農業機械の普及。農業大国における大規模農業の台頭。
アグリカルチャー3.5	2000年頃～	部分的なICTの活用。植物工場や生産管理システム。
アグリカルチャー4.0	2010年代後半～	IoTを活用した「農業従事者 皆が儲かる農業モデル」の実現。

次世代の国づくり

出所：講演者作成

2年前、弊社が主催させていただきましたシンポジウムにご参加の方は、その際に私どもがご提唱申し上げた「アグリカルチャー4.0」というコンセプトをお聞きいただいたかと思えます。世界の農業、日本の農業というのは、初めは雨に頼っていた農業でした。そこに水を引っ張るようになった、肥料を入れるようになった、機械を使うようになったということで、かつての農業革命であったり、20世紀でございますと「緑の革命」というのが起きて、どんどん世界の農業は発展してきました。

一方で、農業が発展したから農村が豊かになったか、農業者が豊かになったかということ、必ずしもそうでない部分も出てきました。なかなか現場の農業者の方が儲からず、大きな企業だけが儲かる、そういうふうな農業も世界的に見ると幾つもございます。そこで、私たちが以前提唱したのが「アグリカルチャー4.0」。農業者全員が儲かる、そういう新しい農業を作りたいということで、私どもは青写真ではございますが、描いてご提唱申し上げました。

【はじめに】 アグリカルチャー4.0の2つのポイント

- アグリカルチャー4.0には、「儲かる農業」と「皆ができる農業」という2つのポイントがある。
- 2つのポイントにより、一部の農業者だけではなく、農業者全員が十分な収入があり、かつ誇りを持って農業を営む社会を目指している。

アグリカルチャー4.0の2つのポイント

第1のポイント 「儲かる農業」	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 単価を向上させること ✓ 単収を向上させること ✓ コストを低減させること
第2のポイント 「皆ができる農業」	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 経験の多寡を問わないこと ✓ 体力や筋力に依存しないこと ✓ 農業の規模や品目に制約されないこと ✓ 資金力を問わないこと

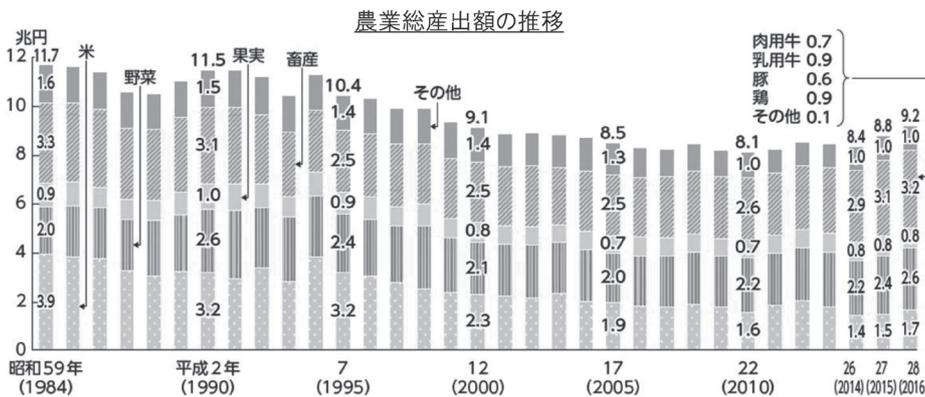
そのアグリカルチャー4.0の実現のためのポイントは、大きく二つあると考えております。一つが、まずは儲かる農業であること。もう一つが、皆ができる農業であること。この二つでございます。

やはりどんどん農業に対して新しい方が夢を持って参画いただくためには、農業自体、きちんとした対価が得られるというのは当然のことだと思います。もう一つ、農業は難しいというご意見がたくさんあります。そういうところに対して、まさに今、ICT、IoT、AIといった先進技術がサポートすることによって、農業に関心のある人が農業をちゃんとやれる、そういう時代がアグリカルチャー4.0の描いている世界観でございます。

そのなかで、日本のスマート農業という新しいトピックを皆さんにお話ししたいと思います。まさに最近、テレビ、雑誌、新聞で、しょっちゅうご覧いただくキーワードだと思います、スマートな農業。海外ですと、アグリテックという言葉も使われています。それが今、どこまで来ているのか。

1. 明るい兆しが見え始めた日本農業

- 日本農業は長期にわたり衰退傾向が続き、農業産出額、農業従事者数ともに大きく低下。
 - ✓ 離農者の増加により、販売農家数は1990年の半数程度にまで減少。農業就業人口は200万人を切る状況に。(平均年齢は約66歳)
 - ✓ 耕作放棄地面積(主観ベース)は42.3万haまで増加。(2015年)
- 一方で、農業産出額は3年連続で増加。V字回復できるかの分水嶺。



次世代の国づくり

そのなかでスマート農業の重要性について、一つお話ししたいと思います。それが何かというと今、日本の農業はV字回復できるかこのまま、さらに右肩下がりになってしまうのか、そのまさに分水嶺に差しかかっています。

こちらは農業白書の数字です。統計的にはもう1年新しいものが出ていますが、農業の産出額は3年連続で伸びているんです。なので、これまで日本の農業というと、暗い、厳しい、もうだめだ、というようなことが念仏のように唱えられてきたのですが、今、実はそうではない、農業にも明るい未来が描ける、その兆しが出てきたのだと思います。一方で農業者の数はどんどん減っている。弊社のエコノミストの試算ですと、2035年、農業者100万人時代がやってきます。

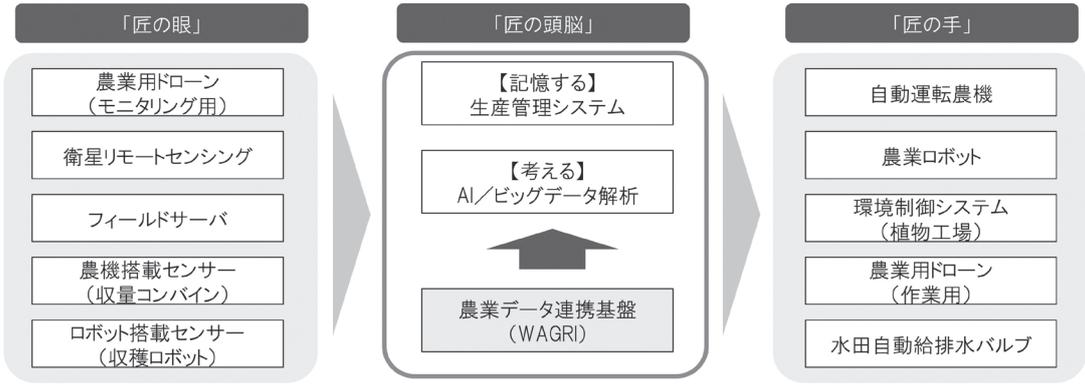
このように明るい指標と暗い指標が混在している中で、どうやってV字回復するか。将来の日本の歴史の教科書を見ると、21世紀、最初の10年、20年で日本の農業はぐっと勢いを取り戻してきたんだということが書けるかどうかというのは、今、まさに私たちの世代にかかっているのだと思います。



2. ここまできた「スマート農業」

- 2018年度は自動運転トラクター、農業用ドローン、農業データ連携基盤等、スマート農業の重要技術が次々と実用化。「スマート農業元年」ともいうべき年に。
- スマート農業を導入して成功する事例が増加中。いかにスマート農業を使いこなすかが、農業ビジネスの成功の鍵に。

スマート農業の3分類



出所：講演者作成

次世代の国づくり

5

Copyright (C) 2019 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

そのなかでスマート農業、いろんなものがございます。匠の眼であったり、頭であったり、手であったり。

匠の眼というのは、まさにデータを取得することです。ドローン、今日は稲田さんにパネリストでお越しいただきました。ドローンで作物や農地を見る、センサーによって気象情報を見るというのがある。

匠の頭脳というのは、覚えることと考えることです。このなかで農業の覚えることというのは、今、非常にいろんなサービスが充実してきました。たとえば私たちの関連する農場では、月額500円で、作業記録であったり気象情報を整理するようなアプリケーションを使っています。それをさらに後押しするために大きな政策がすでに動いています。実は、ちょうど今日はいいタイミングだなと思っているのは、2019年4月1日から正式稼働するのが、こちらの匠の頭脳の一番下に黄色で書かせていただきました農業データ連携基盤、通称WAGRIという仕組みです。後ほど、少し中身のお話をしたいと思います。こういう新しいデータプラットフォームが次年度頭からできますので、まさに政策レベルでも農業者の現場レベルでも、スマート農業というのはもう待たないという状況です。

最後、1番右側、匠の手。私たちの代わりに農業をやってくれる機械、ロボットです。会場の皆さんに一つ質問してみたいと思います。皆様方の中で、ちょうど前のクールですがTBSのドラマの「下町ロケット」をご覧になられた方がおられましたら、手を挙げていただけますか。

ありがとうございます。ありがとうございますと言っても、別に私が出たわけではないんですけども。まさに、日本の農業の新しい流れがああいう形で小説としてドラマになって、皆さんに知っていただけたところが出てきたわけです。まさに日本の農業がスマート農業という新しい流れの象徴になって

3. 実用化が進む自動運転農機

- トラクター等の農機の無人運転も技術開発が進み、大手農機メーカー各社から商品化。
- トラクターに搭乗せず、外部からタブレットPCで複数台をモニタリングする形を実現。
- 普及の加速には、農地間移動に関する規制緩和や、圃場内での事故発生時の責任分界点等の取り決め等が重要。

自動運転トラクター(内閣府SIPでの実証)



出所:講演者撮影

自動運転アシストコンバイン(有人走行)



出所:株式会社クボタ

次世代の国づくり

いるのが、この自動運転のトラクターやロボット、もしくは人工衛星を使った新しい技術でございます。それでは、幾つか具体的な事例をご覧いただきたいなと思います。

一つ目が先ほどの「下町ロケット」にもございました自動運転の農機です。こちら、左側がトラクター、右側がコンバインでして、実は、自動運転のトラクターには、走行をアシストするもの、有人のものについていくもの、完全に自動で走るもの、さまざまなレベルのものがあります。そのなかでとくに最近注目が高まっているのが無人で走るトラクターです。

これによって、例えば私が農作業を行っているときには、トラクター1台分の能力しか発揮できなかったわけですが、アメリカ、オーストラリアのように広大な農地で巨大な農機を使えば、もちろん効率は上がりますが、日本の田んぼ、畑は、皆様ご存じのとおり、小さな区画のものがあります。巨大なトラクターは走れないんですね。そのときにどうするか。2台一遍に動かそう、5台一遍に動かそうというのが、この技術です。

【参考】圃場で作業を行う自動運転トラクター

実際に見ていただきたいなと思います。こちら手前にある青いトラクター、あと奥にもう一台ございます。この2台を一遍に作業の方には手元にあるタブレットパソコンで動かしています。今、ちょうどいいアングルですね。運転席を見ると、誰も乗っていないことがご覧いただけると思います。当然、奥のトラクターにも人は乗っていません。こういう形で、例えば北海道だと5台、7台走らせているわけです。

となると、一人の農作業者が1分間、1時間で耕せる田んぼ、畑は、5倍、7倍、10倍になっていくわけです。逆算すると、お米1粒当たりの人件費は5分の1になっていくわけです。こういうふうな新しい世界観。海外のような超巨大化で効率化することはできないけれども、日本は日本のよさを生かした効率化ができるのではないかと。それを助けるのがIoTなのだと思います。

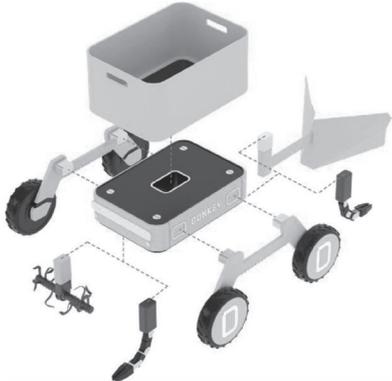


日本総研
The Japan Research Institute, Limited

4-1. 自律多機能型農業ロボット『MY DONKEY』

- 環境認識、制御、通信、給電等の機能を備える中央のベースモジュールに、さまざまなアタッチメントを接続することで、多くの品目・作業に対応可能。
- 農業者の自動追従による作業支援や圃場内の自律走行が可能。

MY DONKEYの構造



出所: 日本総合研究所

栃木県茂木町での実証



出所: 日本総合研究所撮影

次世代の国づくり

7

Copyright (C) 2019 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

ただ、こういうふうなトラクターがなじむ農業となじまない農業がございます。私の地元の広島はもっと狭い農地で、そこでいろんな野菜をつくっている。もしくは温室のなかでトマトとかをつくっている農業者がいます。そういう方々に対して、私たち、日本総合研究所では、農業ロボットでお助けできないかという取り組みを進めてきました。農業ロボットMY DONKEYというものです。もしかしたら、日本総研の活動をご覧いただいている方は、いろんなところで実物であったり講演を見ていただいたかもしれません。今日も外に置いてありますので、帰りにぜひ見ていただければと思います。

このMY DONKEYですが、特色が二つあります。一つ目はいろいろなアタッチメントを取り替えることによって、さまざまな作物、さまざまな作業に対応することができるということです。例えばトマトの収穫ロボットがあったとします。トマトの収穫ロボットは、ほかの作物には使えません。トマトの収穫期以外は使えませんということで、実は、稼働率が低いというのが問題になっていました。私たちのつくったMY DONKEYは、そこを何とかブレイクスルーしたいということで、アタッチメントを交換して、さまざまな作業に適用できるようになりました。

あともう一つが、こちらは自動での移動に加えて、1番ベースになるのは、農業者の方々の後ろをつ

いていくという追従の機能です。つまり、農家の方々のサポートをするんですね。MY DONKEY、DONKEYというのは英語でロバですが、なぜ、そういう名前をつけたかという、私たち人間の農業というのは、昔、農耕を始めたときから、牛であったり馬であったりロバであったり、さまざまな農耕家畜に助けられてきています。私たちの仲間、パートナーだったんです。それを今のデジタルの時代に焼き直すとどうなるかというのが、私たちがつくったこの小型農業ロボットです。

 **日本総研**
The Japan Research Institute, Limited.

4-2. 『MY DONKEY』のビジョン

MY DONKEYのビジョン

農業者と作物を繋ぐ

農業者とともに成長する

地域とともに栄える



 **次世代の国づくり**

出所: 日本総合研究所

8

Copyright (C) 2019 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

この農業ロボット、1番最初に本、以前のシンポジウムで提唱させていただいた時から、この三つの基本コンセプトから絶対外れないようにしようと、私自身、自分に言い聞かせてきました。農作物と農業者の方をつなぐということ。農業者の方々と一緒に育っていく、成長していく。そして最後、一番重要なのが地域とともに栄える。そういうロボットを作りたい。誰か一人がこれを使ってほろ儲けするのではなくて、こういうものが入ることによって地域全体が元気になる、そういうものを作りたいなというような思いを書かせていただきました。

【参考】農業者によるMY DONKEYの活用(栃木県茂木町)


出所：日本総合研究所撮影

次世代の国づくり

9

Copyright (C) 2019 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

今日、お越しいただいております茂木町長でございますが、実際、茂木の現場で農家の方々にMY DONKEYを使っていただいています。こちらの動画をご覧ください。

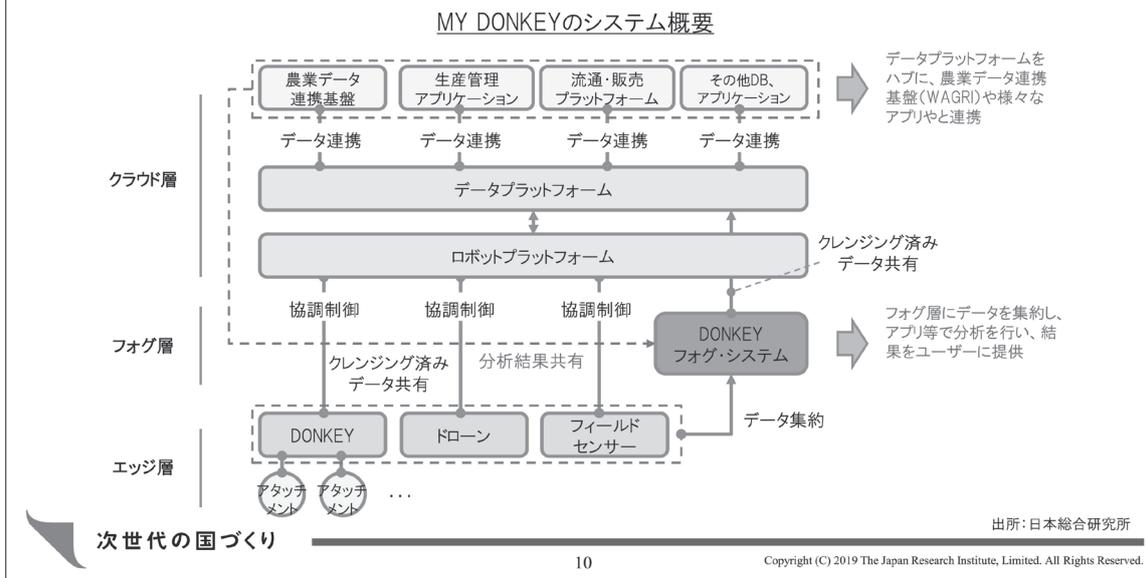
こちらは、今、農業を始めて4年目ぐらいだと思います。40代半ばの地元の農業者の方でして、彼はナス農家さんですが、農作業は、ナスの実の収穫と、もう一つは要らない葉っぱを取る、それによってナス自体を元気にするという作業をしています。そのときに、このMY DONKEYは彼の後ろをついて行って、彼がとまるとDONKEYもピタッととまります。で、彼が動き出すと、またそれについていく。それによって、彼は、籠を背負わなくて、重たいものを持たなくても作業に集中できるようになった。彼はまだお若いですが、これをベテラン農家の方々にも使ってもらっています。

もう一つ、今、葉っぱと実を分けているんですが、これに一つ大きな理由があります。MY DONKEYには、自動で位置情報と時間情報と、あと、どれだけとったかという情報を、データで取得する機能があります。1m×1mの面積でデータをどんどんとっていきます。これによって、この作業の方とほかの作業の方のいろんなやり方が見える化してきます。例えばベテラン農家の方々のうまくナスをつくる秘訣なども見えてくるわけです。

つまり作業支援という機能と、あとはデータが見える化して、それを分析してフィードバックしていく。この二つの機能を持っているのがMY DONKEYの特色です。

4-3. 『MY DONKEY』のシステム概要

- MY DONKEYのシステムは、エッジ層、フォグ層、クラウド層の3層から構成。農業データ連携基盤や民間の生産管理アプリケーションと連携。



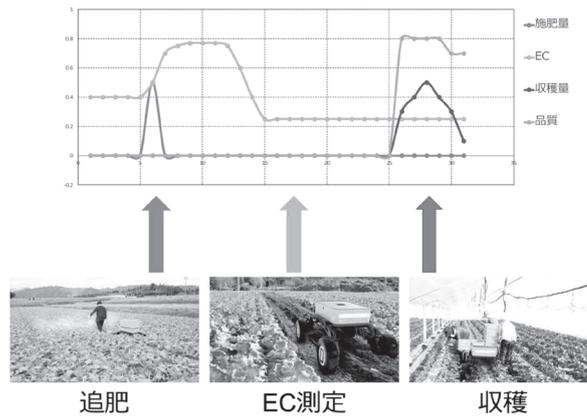
実際にMY DONKEYのシステムというのは大きく三つの層からなっています。一つが、今ご覧いただいたMY DONKEYという機械です。あと、それを動かすためのアプリケーション。最上位には何があるかという、データのプラットフォームがあります、まさに農業者の方。そして今度は、農業者間が連携することで地域全体のさまざまなデータが出てくる。このことによって、例えば新しい農業を始めたい、ナスをやってみたいという時には、先輩農家の方々のご理解を得たうえで、その秘訣をデータとしてお渡しすることができるようになっていくわけです。

こういうようなまさに新しい農業、先ほど、アグリカルチャー4.0のなかで、儲かる農業、皆ができる農業というふうに申し上げましたが、こういうことを体現したいということで、こういうロボットをつくってまいりました。

4-4. 『MY DONKEY』によるデータ駆動型農業の実践

- MY DONKEYでは1mメッシュで作業履歴データ、生育状況データを取得し、データベース化。
- 作業履歴データ、栽培環境データ、生育状況データを分析し、農業者へフィードバックすることで、習熟度向上や地域内でのノウハウ共有を推進。

データ農業サービス(イメージ)



次世代の国づくり

出所: 日本総合研究所

こちらが、先ほどのデータを分析するという事です。よく農業にはビッグデータがないと言われてます。まさにそうだと思います。ですので、私たちはビッグデータを自分で作っていこうというアプローチをとらせていただいています。

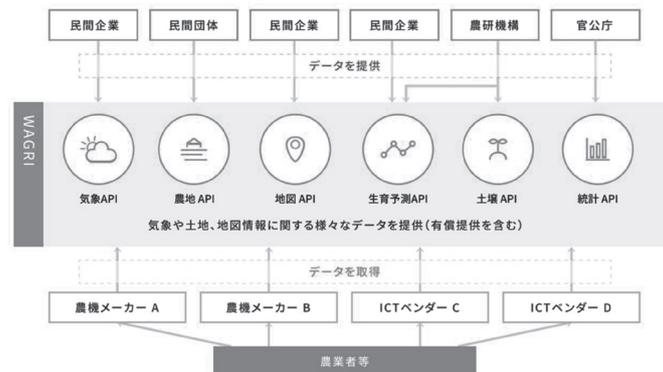
先ほど申しあげましたように、農作業のデータ、何をどれだけまいた何をどれだけとったというのを、1m四方で取っていきますので、例えば1,000平米の農場があったとします、比較的小振りな区画です。今までのアプローチですと、その1区画ごとに一つのデータセットができるわけですが、1m×1mでデータをとっていく私たちのMY DONKEYは、そこで1,000のデータセットがつくれる。こういうアプローチをとっています。

やはり農業者の方々、お互いにいろんな技術を共有しながらこれまでもやってこられましたので、それを助けるようなロボットでありたいと思います。

5. データ駆動型農業を支える「農業データ連携基盤」

- 内閣府「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」を通して、さまざまな農業関連システム、データベースがつながるデータプラットフォーム「農業データ連携基盤(WAGRI)」を構築。
- 農業者は、より多くのデータ(農地、気象、資材、地図等)やアプリケーションを容易に利用可能に。
- 農業データ連携基盤協議会には300社・団体以上が参加。2019年4月より国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構を中心に本格稼働。

農業データ連携基盤の概要



次世代の国づくり

出所: 農業データ連携基盤協議会

このパートの最後の部分でございますが、それを支えるような、スマート農業を支えるようなものが先ほど申し上げた農業データ連携基盤です。これまで農業にはいろんなデータを使ってきたのですが、一つ問題がありました。世の中には役に立つデータがたくさんあるんですけども、農業者の方々がそのデータを実際に使うことができないという事実があったわけです。

なぜか。今、実際にパソコンとかスマートフォンを使ってさまざまな農業支援のアプリケーション、ソフトを使う方が増えてきました。ただ、このアプリケーションが使えるデータは、そのシステムベンダーが契約しているデータソースなんですね。そのデータベースだけなんです。例えば世の中にはたくさんの気象の情報があります。地図のデータもいろいろなところが出しています。ただ、そのすべての情報を各システムが連携して、システムを改良してとってくるというのは非現実的でした。それが、今、まさに変わっているわけです。

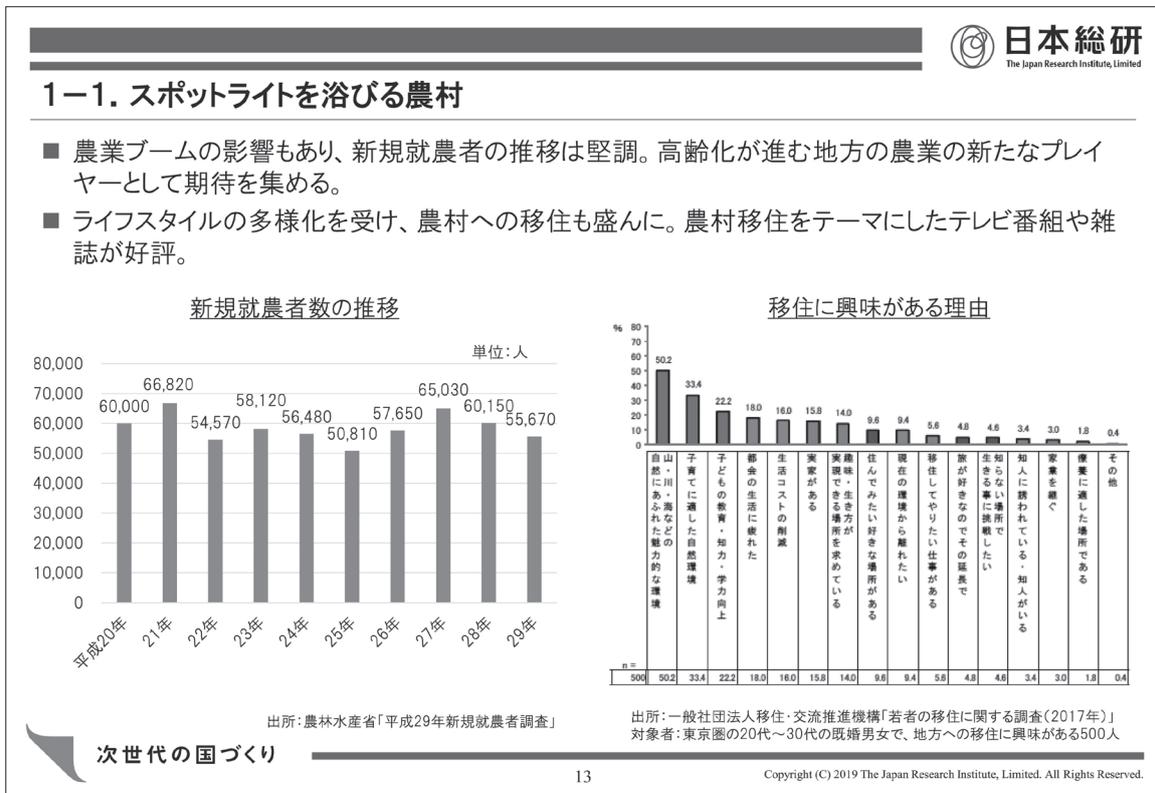
この農業データ連携基盤という公的なプラットフォームができることによって、日本中、時には世界のさまざまな有用なデータがここに集まりました。私たち農業をやる者は、この農業データ連携基盤を通していろんなデータが使えるようになる。まさにこのような形でさまざまな自動運転の農機、ドローン、ロボット、そしてこのようなデータ連携のプラットフォームができ上がってきています。スマート農業というのは、今、まさに元年を迎えたというところでございます。

〔Ⅲ. スマート農業から農村デジタルトランスフォーメーション(農村DX)へ〕

それでは、このスマート農業がこのまま続いていくと、日本の農業はバラ色の未来があるのかという

と、さすがに私もそこまで力強く言うことはできないと思います。なぜか。スマート農業という技術を入れただけでは、一人、二人と農家の方個別の成功事例ができるだけだからです。農業が儲かれば、地域の課題がすべて解決する。さすがにそこまで楽天的なことは言えないと思います。

ということで、今、私たち日本総研が注目しているのは、今、農村という新たなコミュニティにスマート農業という新しい技術が入ってきた。まさに切り込み隊長として入ってきたわけです。このデジタル化の流れをどう広げていけば、豊かな農村、魅力的な農村になっていくのかということを考えました。それが私たちが提唱している農村デジタルトランスフォーメーション、農村DXという新たなコンセプトです。



ひとまず、農村というのはどういうところなのか、改めて見ていきたいなと思います。私も仕事柄、毎週毎週、全国の農地に行かせていただいています。ちょうどこの週末は高知県に行って、ピーマンやシトウ、ナス、トマトの専業農家を回らせていただきました。

全国でいろんな農村があります。いろんな魅力があります。そういうふうな魅力、もしくは農業に憧れて多くの方々が新規就農——就農というのは、農業につくことです。就職ではなく、就農とされています。また、農村に移住したいという方もたくさんおられます。やはり豊かな自然であったり、きれいな空気であったり、時には、私もたまに感じます、都会の息苦しさとか都会の疲れといったことから、場所を変えてチャレンジしたいという方がおられます。

1-2. 新規就農・農村移住の推進政策

- 農村振興、地方創生を目指し、農林水産省や内閣府を始め、多くの省庁が積極的な支援政策を展開。
 - ✓ 農林水産省では、新規就農者の支援のために、給付金、農地マッチング、設備投資への補助等を実施。
 - ✓ 内閣府・総務省等では、移住・定住促進のため、地域おこし協力隊をはじめとするさまざまな支援策を実施。

就農、農村移住・定住に関する政策(例)



出所：日本総合研究所

次世代の国づくり

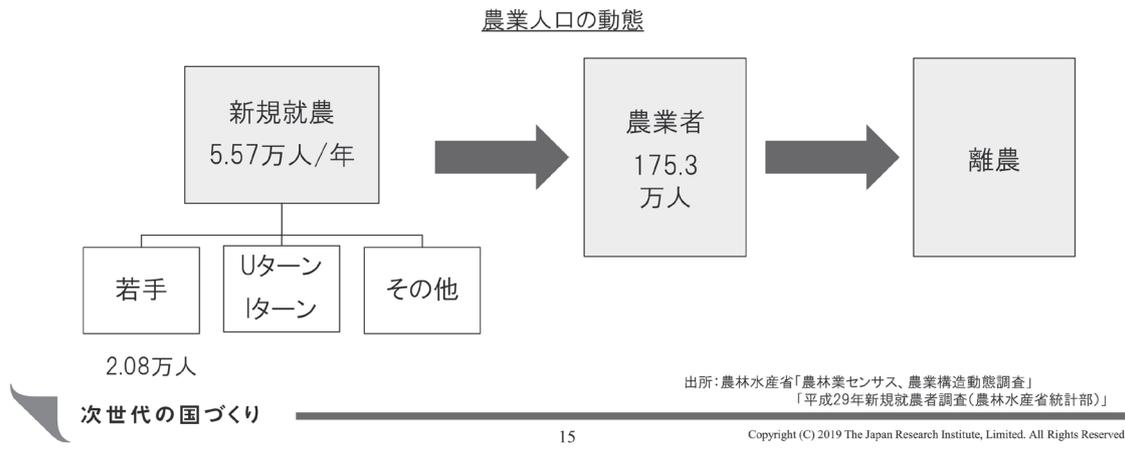
ただ、こういうふうにとんどん新しい方が農業、農村に入ってきていただいているんですが、それが農業で農村を明るく生まれ変わらせているかという、十分ではないというふうに思います。それはなぜか。

今、地方創生であったり農業推進、さまざまな政策がとられています。こういうような地域おこしの協力隊、農地を貸してあげるマッチング、まさに日本のいろんな省庁、政府全体となって農村移住とか新規就農をサポートしているにもかかわらず、なかなか地域に明るい兆しが見えてこない。このギャップは何だろうというふうに、私は毎週毎週いろんな地域を回らせていただきながら、時には地元の広島に帰りながら感じていました。

たくさんおられるんです。こういう制度で新たにこの町にやってきました、こういう制度を使って東京から戻ってきて地元で一旗上げました。それが農村の未来にまだつながっていないところ、それを考えたいと思います。

1-3. 新規就農者はなぜギブアップしてしまうのか

- 農業・農村生活への関心は高く、若者、Uターン・Iターン・Jターン人材、定年退職世代等の多くの新規就農者や移住者が存在。
 - ✓ 新規就農者の約4割が若手人材。
- ただし、新規就農者の定着率は低く、3割が5年以内に離農。農業活性化・地域活性化には必ずしもつながっていない状況。



こちらのページ。実は、毎年毎年入ってきていただいている新規就農者、とくにそのなかの4割は若手の方なんです。非常にフレッシュで、今後の農業を背負っていただく、農村を支えていただく方々なんです。実は、年齢にかかわらずではありますが、その3割が5年以内にギブアップしてしまいます。

冒頭、弊社社長の瀧崎のほうからも、そのギブアップしている人たちに対して何とかできないかというような挨拶がございました。まさに、私たちの問題意識はここにあります。何で農業、農村が好きなのに諦めないといけないのか。ここを解消することができれば、そういうような方々が次の未来を作っていただけるのではないかと。それを支えたいというのが私自身の思いです。